

## クロムウェルはプーチンか？——マーヴェルの三部作から

植月 恵一郎

令和4(2022)年の大きな出来事として、2月から未だ終わらぬロシアとウクライナの戦争と9月のエリザベス2世の崩御とチャールズ3世即位が挙げられると思う。この戦争の責任者プーチン(Vladimir Vladimirovich Putin)から連想するのは、十七世紀イングランドでは護国卿(Lord Protector of the Commonwealth)として王にも等しい存在である一方、アイルランドでは虐殺者としてとらえられ、現在に至るアイルランド問題を確実にしてしまっただクロムウェル(Oliver Cromwell)である。

一方、チャールズ王の名は、清教徒革命において斬首されたチャールズ1世を思い出させる。長いイギリス史上唯一の共和政を宣言した軍事政権の立役者の銅像は、ウェストミンスター寺院前にあり、その向かいの聖マーガレット教会のチャールズ1世の胸像と今も対峙している。

本発表では、ミルトン(John Milton)とともにクロムウェル政権を支えた一人であるマーヴェル(Andrew Marvell)のクロムウェル三部作(“An Horatian Ode upon Cromwell’s Return from Ireland,” “The First Anniversary Of the Government under O.C.,” “A Poem upon the Death of His Late Highness the Lord Protector”)を手がかりに、同時代の詩人から見たクロムウェル像を探してみたい。

## ロバート・サウジーの「戦う偉人」—『ワット・タイラー』、『ジャンヌ・ダルク』、そして『ネルソン伝』

小林 英美

本報告は、ロバート・サウジー(Robert Southey, 1774-1843)が作品化した3人の「戦う偉人」をとりあげ、作品の政治・社会思想と大衆嗜好性について考察するものである。

ウォータールーの戦い(1815年)が終わり、第二次パリ条約によって政治体制は1790年以前に戻された。だが、政情・世情は不安定で、革命とナポレオン戦争の記憶がまだ鮮明な1817年に、劇詩『ワット・タイラー』(Wat Tyler, 1817)は匿名出版された。しかし題名の下に付された短詩から、作者は1813年にイギリス・桂冠詩人になったサウジーであることが明かされており、作者に無断で出版されたものであった。戦う農民タイラーを主人公にした作品は、サウジーが19歳の時(1794年)に創作し、ジャコバン派の出版者リッジウェイ(James Ridgeway)に預けた後、他の出版者に渡っていた「忘れ物」であった。保守派となっていたサウジーは自らの「若気の至り」と対峙することになった。

そんな『ワット・タイラー』と同時期にサウジーが創作していたのが、叙事詩『ジャンヌ・ダルク』(Joan of Arc, 1798)である。こちらは正式に1798年に出版したものである。『ワット・タイラー』と同じく中世を舞台にしているが、舞台は敵国フランスで、主人公はイングランドを打ち負かすジャンヌ・ダルクであるところが興味深い。彼女とその周辺人物の設定や言動等には、上掲作品にも通じる彼の革命思想や

社会観、そして大衆の嗜好に寄った作風が見いだせる。

それから約 15 年を経て、桂冠詩人になった年に、彼は『ネルソン伝』(*The Life of Nelson*, 1813) を出版した。上記の 2 作品と異なり、様式は散文であるし、ほんの 10 年ほど前を生きた現代の有名な戦士の伝記である。それゆえに上掲作品のようにフィクションを盛り込む余地は大きくないし、サウジーの政治思想上の立場も大きく変化した。しかし、大衆の嗜好を配慮した作風は継承されており、英雄ネルソンの伝記として、不動の地位を長く維持することになった。

### キャラクターとしてのキャメロン夫人—ヴァージニア・ウルフによるジュリア・マーガレット・キャメロン像の生成

吉 田 えりか

ジュリア・マーガレット・キャメロン(*Julia Margaret Cameron*, 1851-79)は、写真家としてのキャリアは 15 年余りと短いながらも、近年では盛んに展覧会も行われ、ヴィクトリア朝を代表する写真家としての地位は確立しているようである。作家のヴァージニア・ウルフ(*Virginia Woolf*, 1882-1941)にとってキャメロンは大伯母にあたり、家にはキャメロンの撮った写真が飾られ、キャメロンとの直接の知り合いも身近にいた。型にとらわれない撮影手法の斬新さ、写真から収入を得ることを目指した女性キャリアの先駆けであったことなどいろいろな面において、キャメロンはウルフの手本と言ってもよい人物である。しかしながら、*Victorian Photographs of Famous Men and Fair Women* (1926) のためのウルフによる序文“*Julia Margaret Cameron*”や、キャメロン夫妻らを題材にした戯曲 *Freshwater*(1976) の中でキャメロンは、偉大な写真家というよりは、写真に取りつかれ現実離れした風変わりな人物として描かれる。特に *Freshwater* はウルフ自身が“*farce*”(笑劇)と呼んでいるだけに、キャメロン夫人は極端な行動や物言いで笑いを誘うユーモラスな人物として登場する。本発表ではジュリア・マーガレット・キャメロンの人物像や作品を概観したうえで、ウルフが作品でどのようなキャメロン像を作り上げ、なぜそのように描いたかを、ウルフの伝記についての評論などを参照しながら考察したいと考える。